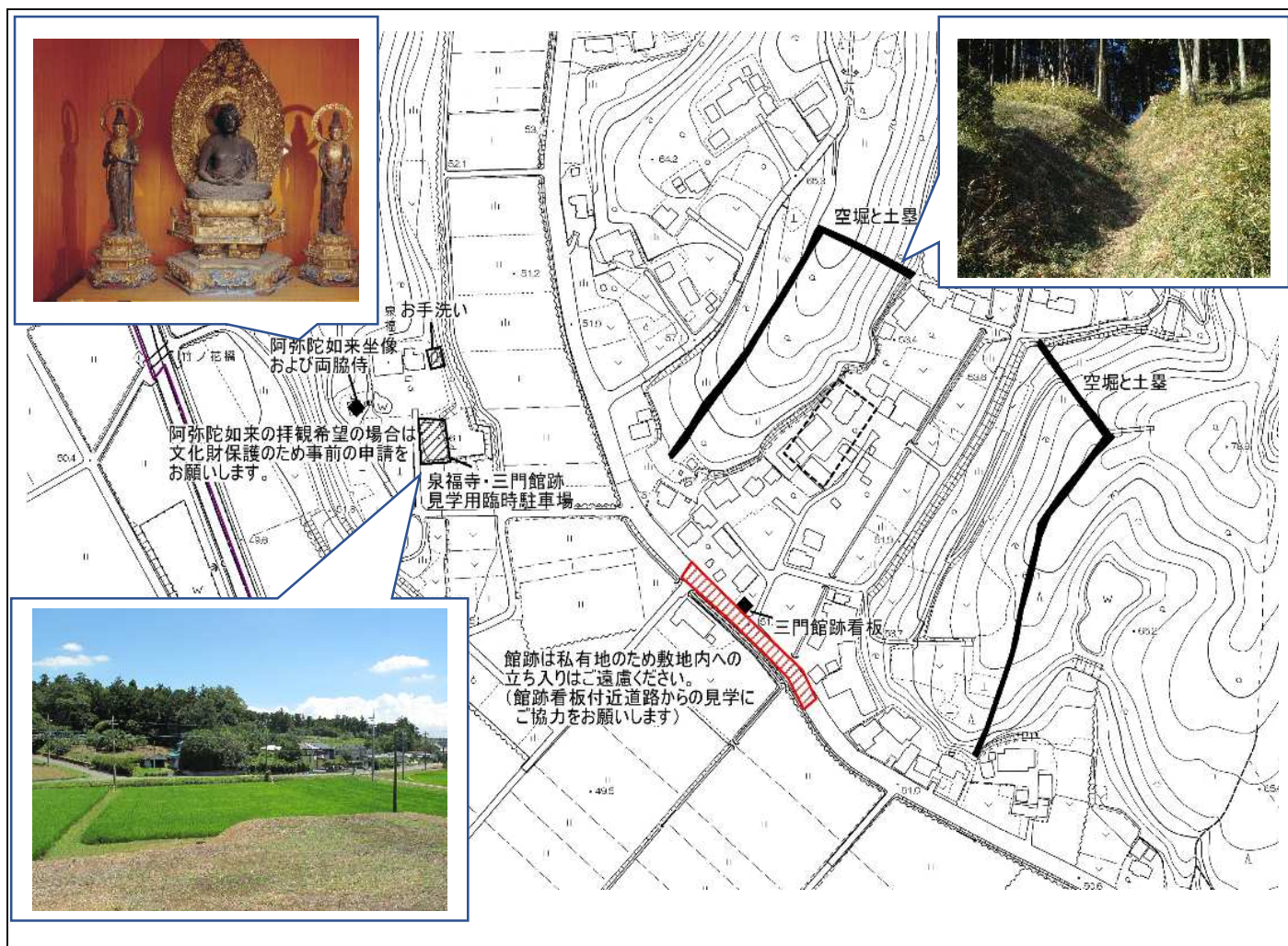


三門館跡・泉福寺阿弥陀如来坐像について

令和3年12月



三門館跡遠景（泉福寺駐車場から）

三門館跡（みかどやかたあと）

三門館跡は、表紙の地図のとおり東西を丘陵に挟まれた間にあったとされる館跡で、丘陵上にある空堀と土塁に囲われた内側約200mの方形範囲が館の敷地であったとされています。現在は空堀と土塁の一部が残るのみです。

- ・所在地 滑川町大字和泉字三門
- ・規模 土塁、堀 西側丘陵上 南北約180m 丘陵裾に向かい東へ約50m
東側丘陵上 南北約180m 丘陵裾に向かい西へ約60m
館（推定）東西25m×南北50m
- ・館に関する文献
『比企年鑑』S27：比企遠宗 『日本城郭全集』S42：比企朝宗？
『埼玉県の城館跡』S43：五所五郎丸※ 『日本城郭体系』S54：毛呂太郎季綱所領
『日本の古城跡』S58：野営のための陣城 『滑川村史』S59：毛呂氏の所領
『図説中世城郭辞典』S62：一時的な陣城 『中世の城と考古学』H3：臨時的な城
『城郭資料集成中世北武蔵の城』H15：毛呂太郎季綱の所領
『比企遠宗の館跡』H22：比企遠宗の館 『滑川町歴史点描』R3：毛呂氏の館跡

この館の主については資料が乏しく、詳細は不明ですが、諸説あり、上記の各文献などで様々な書かれ方をしています。主なものは大河ドラマに関連してくる比企氏の比企遠宗の館とするものや現在の毛呂山町周辺を拠点としていた毛呂太郎季綱の所領、源頼朝の近習で曾我兄弟の仇討ち事件で頼朝を救ったとされる五所五郎丸の館とする説などがあります。

- ・『吾妻鏡』にみえる武蔵国泉・勝田

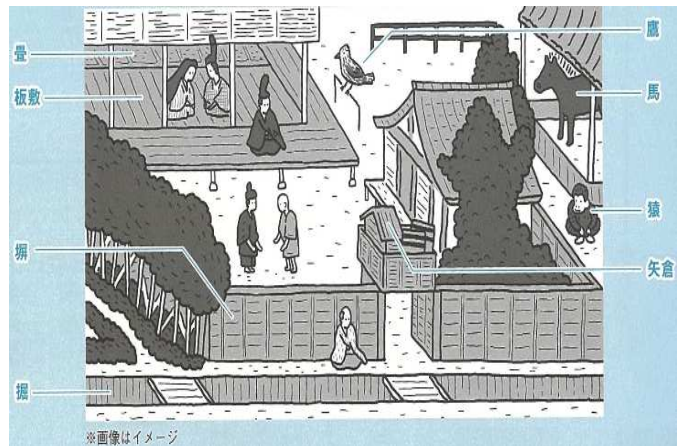
『吾妻鏡』には、鎌倉幕府創設後まもない建久4年（1193）2月10日の条に「毛呂太郎季綱、蒙勤賞武蔵国泉勝田…（以下略）」とあり、将軍頼朝より毛呂氏が滑川町和泉と嵐山町勝田と思われる地を恩賞として与えられたことが記されています。このことから、鎌倉時代を通じて毛呂氏の所領であったと思われますが、三門館跡や泉福寺にも毛呂氏との関係を示すものはありません。毛呂氏の所領になる前に比企氏や五所五郎丸の館であった可能性があります。こちらも明確にそれを示す資料はありません。

- ・『吾妻鏡』（東鑑：あずまかがみ）は鎌倉時代に成立した歴史書。初代源頼朝から第6代将軍宗尊親王までの6代の将軍記。治承4年（1180）～文永3年（1266）までの記録。
- ・「五所五郎丸」（御所五郎丸：ごしょごろうまる）は平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての武将。曾我兄弟の仇討ち事件で源頼朝の危機を救ったとして知られる。

当時の武士の館は下図のように方形の敷地の周囲を堀や塀、柵などで囲んだものが多く、門には門番が配置され、矢倉が設けられたりと敵の襲来に備えたりしていました。また、正面庭を挟んで主屋があり、離れや厩があるなどの構造があり、馬や馬の魔除けの猿、鷹などの動物が飼われていることが多かったようで、三門館跡もこれに近い形であったと思われます。



筑前国の武士の館『一遍聖絵』第4巻清浄光寺蔵



左図を参考とした武士の館イメージ図



中世の館復元模型（国立歴史民俗博物館蔵）



三門館西側丘陵上に残る堀と土塁



阿弥陀三尊像収蔵庫脇の礎石と思われる石
(かつて泉福寺に三重塔があり、その心礎に使われたとされる伝承がある。)

比企遠宗

比企遠宗は、比企一族の祖と言われる波多野三郎遠光の孫とされ、若くして京に上り、源為義・義朝父子に仕えたと言われています。義朝に誠実な人柄を見込まれ、久安3年（1147）3男頼朝が生まれた際に、遠宗の妻であった比企の局（比企尼）と共に乳母、乳母夫に選ばれます。

その後、平治の乱（1159）で源氏が平清盛に敗れると、まだ子供であった頼朝は清盛の義母の嘆願などにより助命されましたが、伊豆に配流（1160）となり、同時に比企夫妻も武蔵国比企郡を請所（荘園等の現地支配の代わりに一定額の年貢の納入を請負う）として関東に下向します。

治承4年（1180）頼朝が平家打倒のため挙兵するまでの約20年間、比企の局と共に伊豆にいる頼朝に米などを送り、一切の面倒を見続けたとされ、その間に遠宗は亡くなったとされています。

比企の局(比企尼)「鎌倉殿の13人に登場」

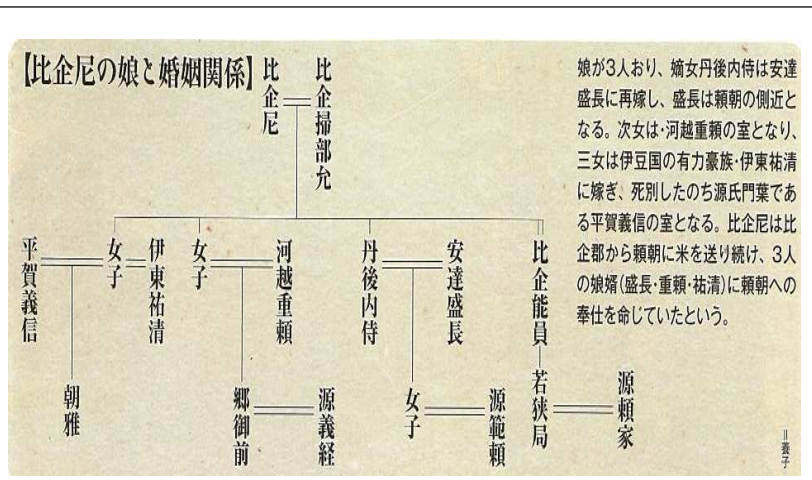
比企の局は、比企遠宗の妻で、頼朝の乳母の一人です。遠宗の死後、髪をおろし出家したため比企尼とも呼ばれます。吾妻鏡の寿永元年（1182）10月17日条に「頼朝が伊豆に流された時、武蔵国比企郡を請所として、夫掃部允（遠宗）に連れ添って下向し、治承4年の秋に至るまで20年の間、何かとお世話を申し上げた。」と記されており、頼朝不遇の時代から支え続けた功労者です。また、比企尼には3人の娘がいたとされ、それぞれ関東の豪族に嫁がせ、娘婿達は比企尼の手足となり、比企一族で頼朝を支えたとされています。

頼朝を長きに渡り支えたことから、鎌倉に本拠を置いた際には比企ヶ谷（現妙本寺）の地が与えられ、頼朝は長年の恩に報いたとされます。また、頼朝の長男で2代將軍の頼家の出産（1182）の際には、この比企ヶ谷の館が産所となったとされており、比企尼の次女、三女は頼家の乳母となり母子2代に渡り源氏嫡流の乳母を務めました。

比企能員「鎌倉殿の13人に登場、合議制となった際の13人のうちの1人」

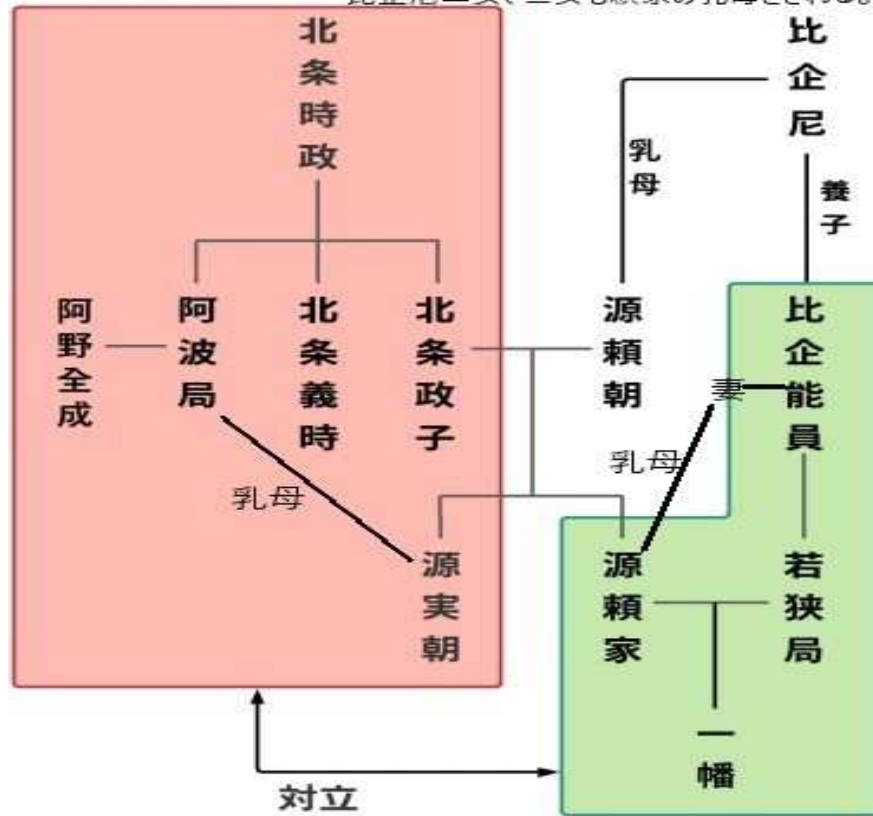
比企能員は、比企尼の甥で子に男子のいなかった比企尼が夫遠宗死後、養子として迎え、比企氏の当主となりました。比企尼の推挙もあり、頼朝の側近として仕え、妻（鎌倉殿の13人に登場）は2代將軍頼家の乳母を務めました。その後、娘の若狭の局が頼家の側室となり、嫡男一幡を産むと將軍家外戚として権勢を強めます。

1199年頼朝死後、頼家が後継となるとその後始まった有力御家人13人による合議制（今回の大河ドラマのテーマ）の1人になりました。しかし、1203年頼家が病に倒れると、比企氏が後見する一幡（頼家実子）と北条氏が後見する千幡（頼家の弟で後の実朝）とで遺産が分割相続されることとなり対立が深まり、北条時政の討伐を図るも先手を打たれ謀殺されました（比企の乱・比企能員の变）。また、同日一幡を含む一族も北条義時に攻め滅ぼされたとされます。



比企能員の変の家系図と相關図

比企尼二女、三女も頼家の乳母とされる。



比企能員
比企能員は、源頼朝の乳母とされ、源頼朝の妻とす。
比企能員は、源頼朝の乳母とされ、源頼朝の妻とす。
比企能員は、源頼朝の乳母とされ、源頼朝の妻とす。



『武
者鑑』比企
能員
国立国会図書館蔵

泉福寺と国指定重要文化財木造阿弥陀如来坐像

- ・所在地 滑川町大字和泉字勝窪 1681
- ・山 号 八幡山泉福寺
- ・宗 派 真義真言宗智山派 （総本山智積院：京都東山）
- ・開 山 建久元年（1190）僧「海伝」による
- ・阿弥陀三尊像

国指定重要文化財（旧国宝）

泉福寺木造阿弥陀如来坐像

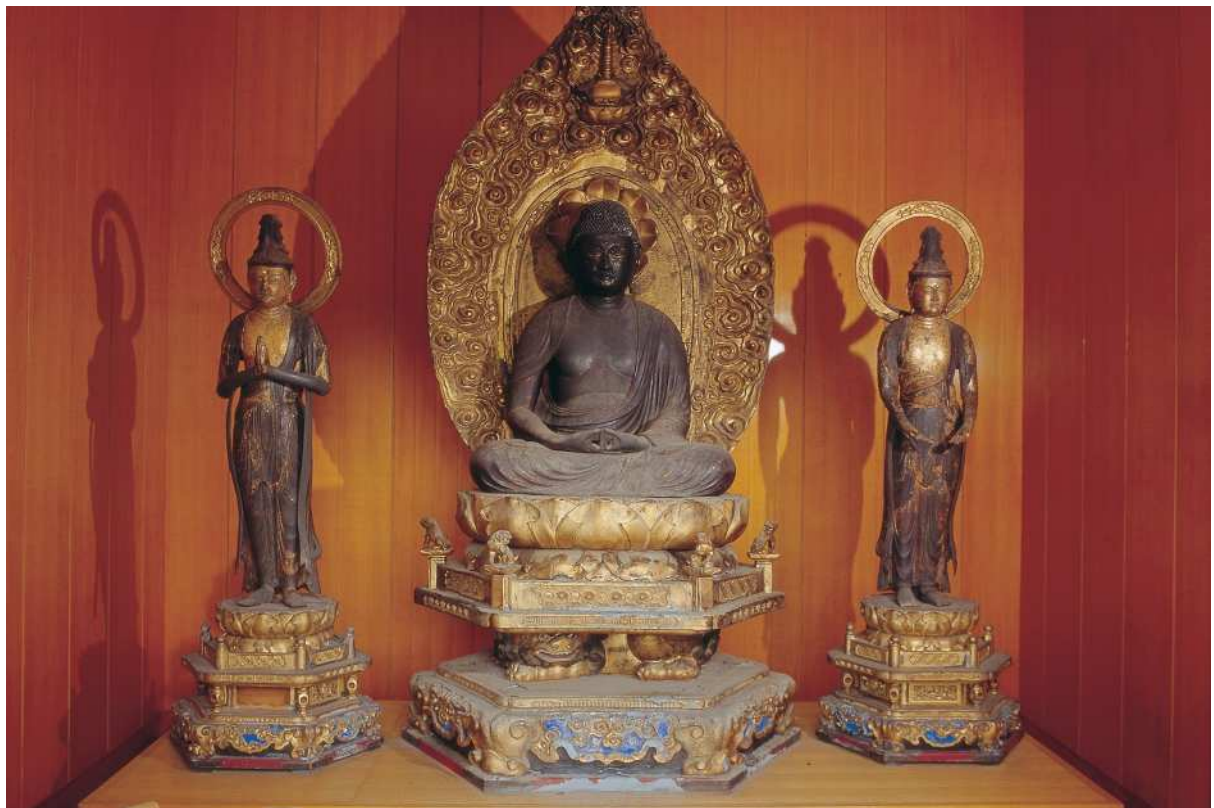
像高 84.3 cm 1964 年指定

県指定有形文化財（彫刻）

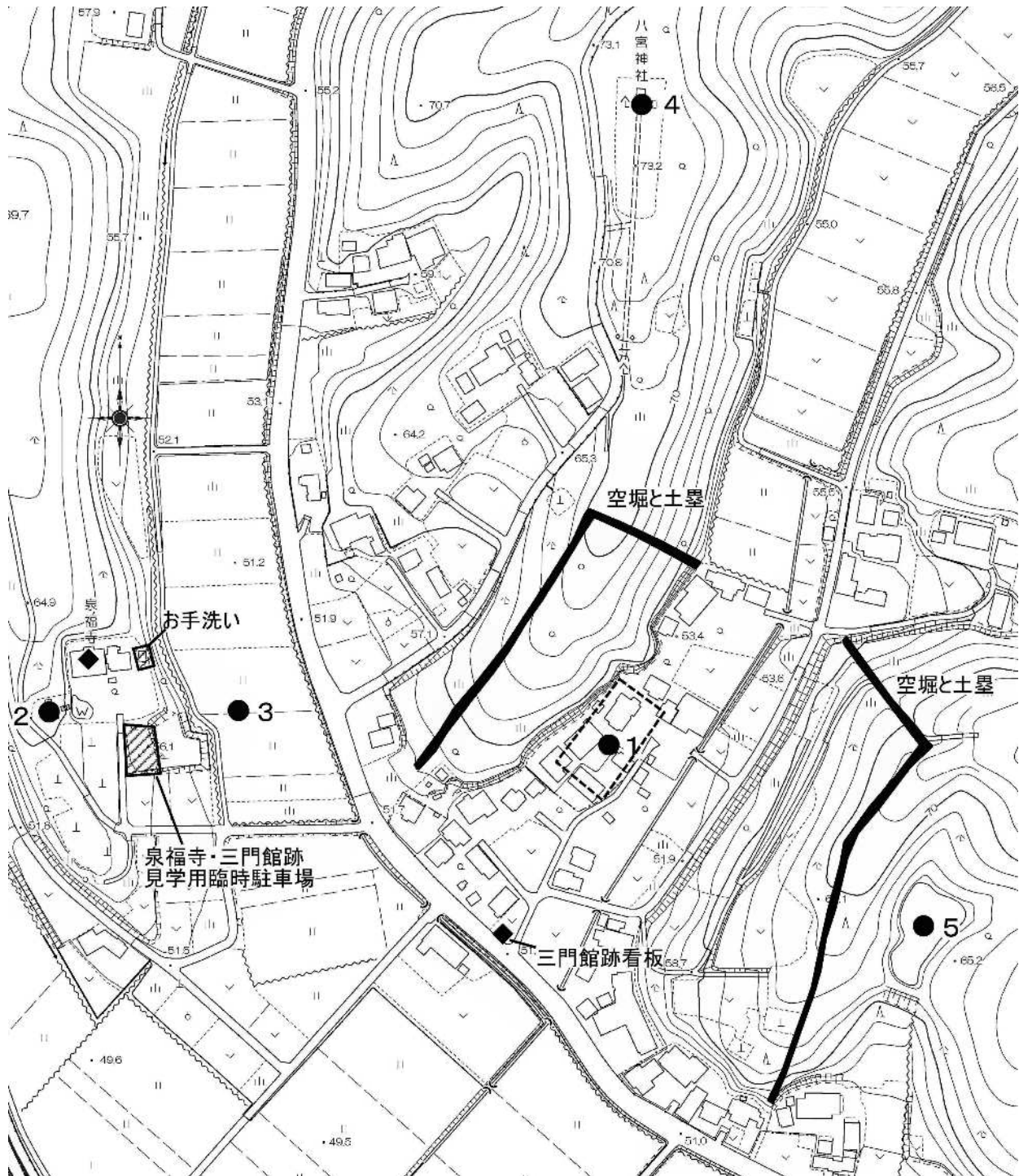
観音菩薩及び勢至菩薩立像（阿弥陀如来坐像両脇侍）

像高 観音 105.8 cm 勢至 105.6 cm 1982 年指定

- ・寺の歴史については幕末の落雷により本堂が焼失したため詳細は不明です。
本尊は国指定重要文化財の木造阿弥陀如来坐像（県内に 8 件あった旧国宝の仏像のうちの 1 件）であり、その作風から平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像を作った平安時代後期を代表する仏師定朝の流れをくむものであるといわれています。阿弥陀如来坐像には建長 6 年（1254）の「大檀那沙弥西願同御芳縁源氏所君達…」という修理銘が残っています。両脇侍の観音菩薩と勢至菩薩は県指定文化財になっています。



木造阿弥陀如来坐像と両脇侍立像（観音菩薩「右」・勢至菩薩「左」）



- 1 三門館跡推定地（個人宅で私有地のため立入りはご遠慮ください）
- 2 国指定重要文化財木造阿弥陀如来坐像・県指定両脇侍、礎石（塔心礎？）
（仏像の拝観希望の場合には文化財保護のため教育委員会文化財保護担当
を通して事前の申請が必要となりますのでご了承ください。）

3 礎石出土地 4 八宮神社 5 陣場沼

三門館跡周辺図 S= 1 / 2 5 0 0